

V. 考察

1. 大蔵派の遺品とその活動

(1)はじめに

今回、修理が行われた額安寺宝篋印塔は、報告の通り「文応元年十月十五日 願主永弘 大工大蔵安清」の銘をもつ。この「大工大蔵安清」は、「大蔵派」と称される工人の一人であり、本塔は大蔵派の最古の遺品であるとともに、関西で唯一、「大蔵」銘をもつ塔である。

大蔵派ならびに大蔵派宝篋印塔については、川勝政太郎氏による一連の研究を嚆矢として、大蔵派を番匠大工として位置づけ、西大寺流律宗の工匠集団として位置づけを行った前田元重氏の研究、各塔の修理報告など、数多くの先行研究がある¹。筆者もかつて、先学によって大蔵派と称されてきた宝篋印塔について検討を行い、その系譜や活動について論じたことがある（岡本2003.2006）。また、近年では山川均氏も大蔵派に関する諸説を提示されている（山川2006.2008）。大蔵派は、石工に関する資料が極めて乏しい中世史上において、律宗の布教活動と密接に関わっていることが知られ、彼らの活動の範囲や実態が窺える事例として、早くから注目を集めてきた。

ところで、これまで研究史上において、「大蔵派」と称されてきた一群の中には、①「大蔵」銘をもつもの、②銘文および形状・比率などから大蔵派の系譜がたどれるもの、③銘はないものの①に酷似し、大蔵派の製作による可能性が極めて高いものがある。また、大蔵派がもたらした様式は、その後の関東で展開する石造物の様式に多大な影響を与え、宝篋印塔については基本的に大蔵派の創出した意匠を模倣することによってこの地方の様式として定着していく（岡本2003）。本稿では①および②を「大蔵派宝篋印塔」、③を「大蔵派系宝篋印塔」とし、④大蔵派の模倣品として展開する一連の様式を従前の研究史を受けて便宜的に「関東様式宝篋印塔」と呼称する。しかしながら、③と④の区分については、先学の研究によっても明らかなおと、各研究者によって若干のばらつきがあり、決定的な分類方法を提示することはできない。ここでは、なかでもより①との類似点が多いものを③と位置づけることとする。

本稿は、これら大蔵派宝篋印塔ならびに大蔵派系宝篋印塔を取り上げ、その活動を概観するとともに、額安寺宝篋印塔の再評価を行うことを目的とする。

(2)大蔵派宝篋印塔と大蔵派系宝篋印塔

今回調査が行われた額安寺塔は、先述の通り大蔵派宝篋印塔中、最古の遺品である。また、本塔は関西では唯一「大蔵」銘が刻まれた塔であり、後に関東で活躍する大蔵派が確かに大和を拠点として活動していたことが銘文から知られるという点においても貴重である。

塔の概要については本書第Ⅱ章2・3項の通りであるが、額安寺塔より1年先んじて造立された生駒市興山往生院塔に代表される、基礎が高く側面を素面とし、隅飾も素面で低いという、比較的シンプルな特徴をもつ大和の大多数の宝篋印塔の諸特徴とは異なり、額安寺塔は基礎ならびに露盤側面を2区に分かって格狭間を刻み、塔身には二重の輪郭を有するなど、比較的装飾的な意匠を有する。低い基礎に格狭間を刻む点、石材が花崗岩である点などの特徴は、後に作られる典型的な関東様式の宝篋印塔とは異なるが、各部に輪郭を設けるなどの装飾的特徴は、総じて関東様式につながる特徴であるといえるだろう。

大和において、こうした装飾的な特徴をもつ塔としては、他に奈良市菩提山町所在の正暦寺塔がある（図1-1）。塔には、関西の宝篋印塔にしては珍しく反花座を有する。反花座は側面素面で高く、上部には複弁反花を刻んでいる。反花は、関西のものの多くが隅部分に蓮弁を配さないのとは対称的に、四隅に各1枚、各面7枚の花弁を刻む。基礎は側面を2区に分ち、それぞれに格狭間を刻出する。基礎上を3段にする点も額安寺塔に共通する特徴である。塔身は額安寺塔と同じく二重の輪郭を作り出し、その内部には金剛界四仏の種子を薬研彫りする。笠は上下2石で作りますが、軒下の段形2段は復元されたものである。笠上は6段、頂部には露盤を作り出し、この部分もやはり2区に分ちて内部に格狭間を入れる。隅飾は2弧で素面。残念ながら銘はないが、塔全体に額安寺塔に共通する装飾的な意匠がみられることから、「大蔵派」の手による宝篋印塔と指摘されてきた塔である（川勝1974）。製作年代も額安寺塔とさほど間をおかない時期とみられ、反花座を有する点を額安寺塔よりも新しい要素とみれば、関東様式につながる要素を額安寺塔以上に持ち合わせている塔と評価できるだろう。

現在のところ、関西において大蔵派の活動や系譜が具体的に知られる資料は、額安寺塔と正暦寺塔の2基のみである。大和において鎌倉時代後期以降、定形化していく宝篋印塔は、塔身に輪郭を有するものの興山往生院塔の系譜に繋がるシンプルな特徴をもつ塔であり、額安寺塔の系譜をひく塔はこの後、関東へと移る。以下、関東における大蔵派宝篋印塔と大蔵派系宝篋印塔を順にみていくこととする。

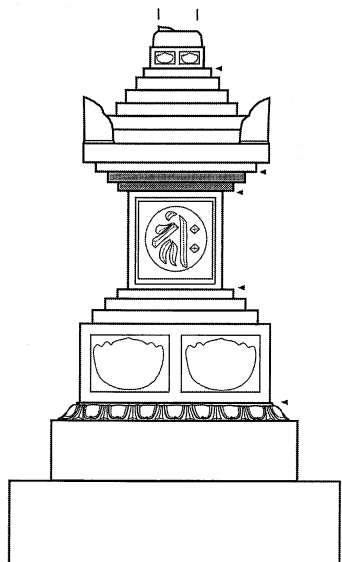
元箱根塔（神奈川県足柄下郡箱根町元箱根、国指定重要文化財、図1-2）

箱根山の山麓、精進池のほとりに、早くから注目されてきた大蔵派宝篋印塔がある。基礎には大きく格狭間を刻み、基礎上は3段。塔身には3面に胎藏界四仏の「ア」・「アー」・「アン」が、残る1面には仏龕内に仏坐像が陽刻される。笠の軒部分には宝篋印陀羅尼と三帰依真言が刻まれる（箱根町教育委員会1993）。隅飾は2弧で素面。笠上は6段で、頂部には側面に2区の輪郭を刻んだ露盤をのせる。相輪は欠損しており、現在は後補材がのる。基礎上および笠下の段形が3段、笠上が6段になる点などは、額安寺塔や正暦寺塔に通ずる特徴であるが、基礎や各部の比率などは、これら二塔や本塔に続く大蔵派宝篋印塔とは異なっており、両者をつなぐ段階の塔であることが窺える。

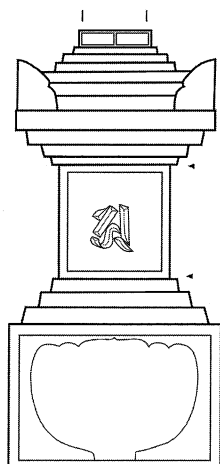
本塔には、基礎部分に長文の銘が刻まれている。前段には、本塔の造立願文が刻まれ、「永仁四年丙申五月四日 大願主金剛佛子^持□円房囿善敬白」とあり、その後に結縁衆として「武石四郎左衛門平宗圖」以下18名が名を連ね、「大工大和國所生左衛門大夫大蔵安氏」の名が刻まれる。さらに、末尾には「供養導師良観上人 正安二年八月廿一日 心阿」とある。これらの銘から、本塔は、永仁4年（1296）に「大和國所生」の大工大蔵安氏によって造塔された後、正安2年（1300）に良観上人、すなわち忍性によって供養が行われたものとみられる。心阿は安氏の後を継いで造塔に携わった大工であるとみられており、正安2年にその名を追刻したものであろう。

余見塔（神奈川県足柄上郡大井町余見、大井町指定文化財、図1-3）

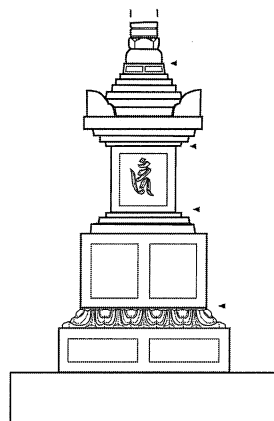
反花座は側面2区に分ち、上端は二重単弁となる²。基礎も2区の輪郭をもち、上端は3段。塔身には輪郭内に金剛界四仏の種子を刻む。笠下を3段、笠上を6段とし、露盤には2区の輪郭をもつ。基礎側面に「大勸進 僧覚一 大仲臣金光 一結衆五十人 大工 藤原頼光 大倉定安 嘉元二年大才甲辰十二月廿日」の銘がある。大工の名は風化で判読が困難なため諸説あるが、姓を「大倉」とみる点は共通しており、大蔵派の作とみられる。この塔の大工を松井一明氏にならって「大蔵定安」とするとすれば（松井2009）、前田元重氏が大蔵派を石工ではなく番匠大工であると位置づける根拠とした称名寺「堂建立書」の中にみえる「大蔵定康」と同一人物である可能性があ



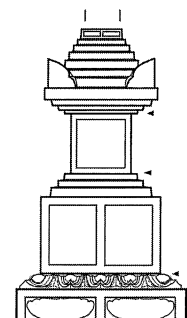
1, 正曆寺塔



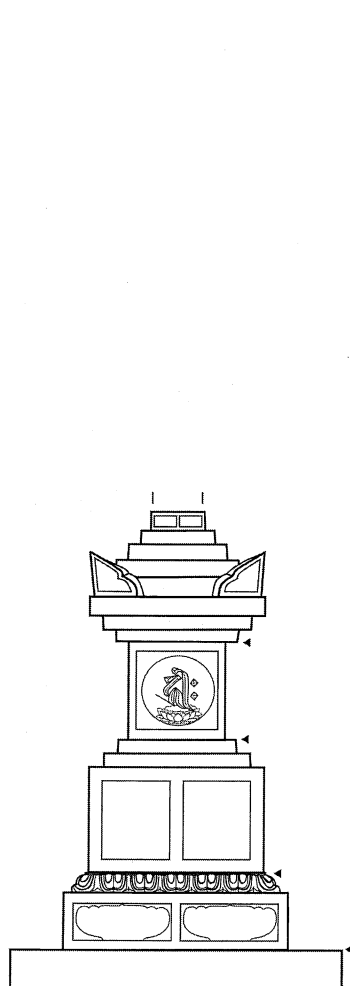
2, 元箱根塔



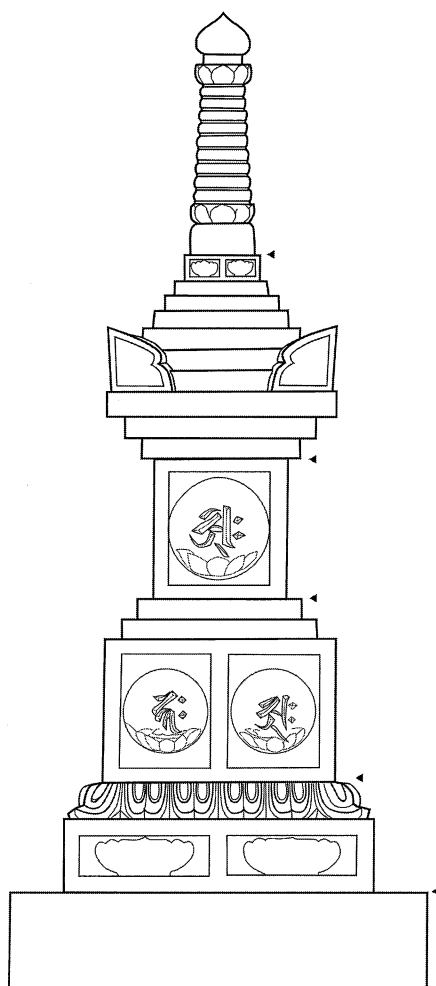
3, 余見塔



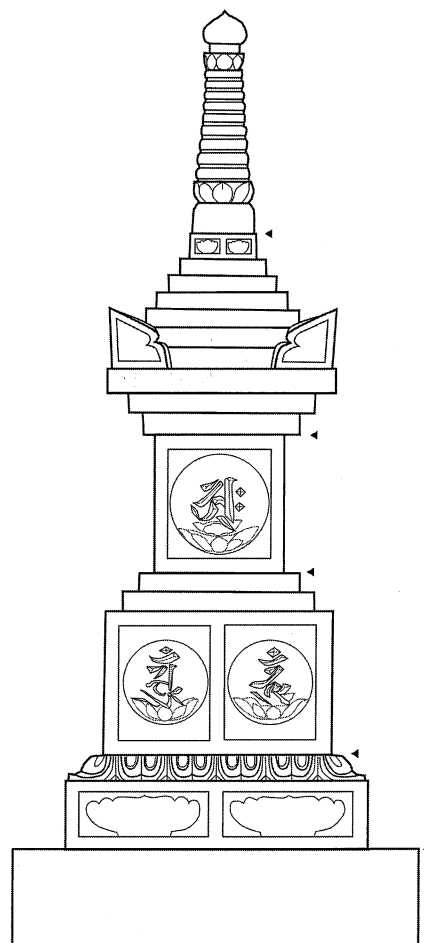
4, 円光寺塔



5, 安養院塔



6, 覺園寺開山塔



7, 覺園寺大燈塔



图1 大蔵派宝篋印塔・大蔵派系宝篋印塔実測図 (S : 1/30)

る。また、「僧覚一」は、泉涌寺第七世長老覚一房覚阿ではないかとされており、本塔の造塔にも律僧が関わっていることが窺える。覚阿は、余見塔に近い足柄上郡最明寺の第二世として住持していたようで、厚木市飯山寺の寺主であったことも知られている（伊藤1977）。

ところで、この余見塔に似た特徴をもつ塔が、厚木市円光寺にある（図1-4）。反花座の側面に格狭間を刻む点、塔身に種子ではなく四仏の像容を表す点などが異なるが、塔の規模、比率、蓮弁の表現など、余見塔と共通する部分が多いことから、余見塔に近い大工の手によって造立された塔であるとみられ、大蔵派系宝篋印塔として位置づけられる塔と考えられる。

安養院塔（鎌倉市大町、国指定重要文化財、図1-5）

基礎の東部分に「…塔婆 □観上人之／…結縁衆之 名字所奉造立如件 徳治三季（1302）戊申七月 日／大工沙弥心阿 大檀那沙弥観杲」の銘がある（（財）文化財建造物保存技術協会1980）。この「大工沙弥心阿」は、元箱根塔に追刻で名がみえる「心阿」と同一人物とみられ、本塔は元箱根塔の造立に関わった心阿の作による塔とみられている。

切石1段の基壇上に反花座を据える。反花座側面は2区格狭間、上端は二重複弁³で、四隅に各1枚、各面5枚の花弁を配する。基礎は側面2区に分ち、基礎上ならびに笠下の段は各2段。塔身には月輪内蓮座上に金剛界四仏種子を流麗に薬研彫りする。隅飾は2弧輪郭付き。笠上は4段でその上に露盤を置く。相輪は欠損し、現在は後補材がのる。

長谷寺宝篋印塔陽刻板碑（鎌倉市、鎌倉市指定文化財）

長谷寺宝物館内に保管されている安山岩製の板碑で、上半部いっばいに宝篋印塔を陽刻する。最下段は方形、輪郭内に格狭間を大きく表す。基礎は2区の輪郭を持ち、基礎上・笠下の段形は各2段。塔身には胎蔵界大日如来の種子を大きく薬研彫りする。露盤は省略されているが、頂部には優美な相輪を立てる。基礎の両側に供された華瓶の表現も陽刻で表される。

塔の上部には光明真言の種子が、塔下には「右志趣者为二親 聖霊等乃至法界 平等利益矣 徳治三年五月 四日沙弥信阿敬白」の銘がある。ここでみられる「信阿」という人物は、元箱根塔ならびに安養院塔にみられる「心阿」と同一人物であることが指摘されている（貫1981）。板碑は頂部に二条の沈線がなく、まるくなっており、石材、華瓶の表現方法など、鎌倉近郊にみられる板碑とは異なる点が多く、宝篋印塔の基本的な構成や比率は安養院塔に共通する部分が多くみられることから、本板碑を造立した石工は、この地方で主に板碑を作ってきた石工ではなく、心阿と同一人物とみるのが妥当であると考えられる。



図2 長谷寺宝篋印塔
陽刻板碑
（長谷寺提供）

覺園寺開山塔（鎌倉市二階堂平子、国指定重要文化財、図1-6）

覺園寺開山智海心慧の塔で、高さ4.27mの巨塔である。基壇上に側面2区格狭間、上端に二重複弁を刻出した反花座をおく。基礎は2区に分ち、輪郭内には蓮座上月輪内に般若理趣經の八大菩薩種子を流麗な薬研彫りで表す。基礎上は2段。塔身には蓮座上月輪内に金剛界四仏種子を刻む。笠上は6段で、その上に露盤をのせる。塔には部分的に漆喰が残り、化粧塔として飾られていた可能性がある。基礎には「開山大和尚／正慶元年（1332）壬申 沙弥禅門口阿 仲秋廿七日造立／營事恵秀 願主尼良阿 大工光弘／住山鑒恵」の銘がある。住山の鑒恵は覺園寺第三世長老で暉山と号する。本塔は、嘉元4年（1306）に示寂した開山智海心慧の二十七回忌の年忌塔として、営

事の恵秀と尼良阿が大工光弘に造立させたものである。

塔下には石室があり、中央に火葬骨を納めた古瀬戸草葉文壺が、また基壇内部に褐釉壺が納められていた（鎌倉国宝館2005）。褐釉壺は山茶碗を蓋とし、内部に銅製鍍金五輪塔を安置していた。五輪塔には「右為信阿聖霊也／元亨三年（1323）三月十九日／孝子光弘敬白」の刻銘があり、内部に歯骨を納めた竹筒が納入されていた。この五輪塔に名のある「信阿」は安養院塔、長谷寺宝篋印塔陽刻板碑を造立した「心（信）阿」と、光弘は、大工光弘と同一人物とみられており、光弘が親である信阿の菩提を弔うために作った五輪塔を、開山塔に納入したようである。

同大燈塔（図1-7）

開山塔と並んで歴代住持の墓所内に立つ覚園寺二世長老大灯源智の塔で、高4.11mを測る。開山塔とは細部に違いがあるものの、基本的な構造は同じである。こちらは基礎に尊勝曼荼羅の八大仏頂種子を刻む。基礎には「正慶元年壬申 大灯大和尚之塔 仲秋廿八日造立／住持比丘鑑惠敬誌／建立尼円観／管持比丘恵秀 大工光弘等」の銘があり、本塔も開山塔同様、大工光弘が造立に関わったことがわかる。

基壇内には褐釉双耳壺が、塔身内から銅製鍍金の台座を有する水晶五輪塔形舍利容器1基が納められていた。基壇には開山塔同様、塔下に石室が設けられていたが、骨蔵器は残されていなかった。

以上が、大蔵派宝篋印塔、大蔵派系宝篋印塔と位置づけられる可能性が高い塔である。これらの塔は、全体として各部に輪郭や格狭間を多用し、装飾的な意匠を有することを特徴とするが、その萌芽は額安寺塔に見られ、大蔵安清が考案した斬新なデザインを発展的に踏襲した結果とみられる。銘文からは「安清—安氏—一定安—心阿—光弘」の系譜が窺えるが、余見塔以降の年号を持つ塔については、各部の比率がほぼ一致することから、これらの系譜が銘文上だけでなく、比率などの属性からも裏付けられるものと考えられる（岡本2003）。

(3)大蔵派とその活動

「大蔵」銘をもつ石造物の塔の形式は、以上にみてきたように宝篋印塔のみであるが、それ以外にも大蔵派が造立に関わったとみられるものがある。

箱根山宝篋印塔が立つ精進池のほとりに、俗称二十五菩薩と称される地藏磨崖仏、虎御前墓、曾我兄弟墓との伝承をもつ3基の五輪塔、六道地藏と称される大型の地藏磨崖仏などがある。これらは、宝篋印塔とほぼ同時期、永仁元年（1293）から正安2年（1300）の短期間に集中して造立されたものである。仏の像容や、立地などから宝篋印塔以外の石造物群についても大蔵派が製作に関わった可能性が高い。

箱根の地は、これらの石造物の銘文にもみえるとおり、地獄があるといわれてきた地である⁴。銘文からは、これらの石造物群の造立に地藏講衆が関わったことが見て取れ⁵、これらの石造物群の造立が一段落したとみられる正安2年に忍性によって供養が行われていることは、これら一連の造営事業が忍性らの大々的な活動によって行われたことを示している。地獄の故地に、地藏菩薩と供養塔としての宝篋印塔や五輪塔を計画的に配することは、それらに結縁することこそが救済への道であることを効果的に示す何よりの宗教的演出となったであろう⁶。そして、これらの工事を実務的に取り仕切ったものこそ大蔵派であった。

彼らは、忍性ととも到大和を発ち、箱根の地でこの大事業に携わり、その後関東へと下向する。中世の石工は出張製作を行っていると言われるが（川勝1957）、彼らは大和の地へ再び帰ることはな

く、関東の地で活動の場を広げることとなり、関東地方周辺の石造物に大きな影響を与えていく。ここまで、額安寺塔が大和の宝篋印塔とは異なる装飾的な意匠を加味した塔であり、大蔵派はその意匠を踏襲して大蔵派様式ともいべきものを作りあげていくことをみてきたが、彼らの意匠は関東地方の宝篋印塔はもとより、その他の形式の塔のデザインにも大きな影響を与えたものとみられる。例えば、称名寺審海五輪塔や極楽寺薬鉢台座などは、余見塔や円光寺塔などと同様の、前田元重氏が「西大寺工匠集団」の特徴として位置づけた二重単弁を有しているし、鎌倉市極楽寺忍性五輪塔や、浄光明寺五輪塔は、安養院塔や覚園寺塔と同様の側面を2区に分ち、上端に二重複弁を入れる反花座を有している。また、大蔵派の特徴として各部に装飾的に輪郭を設けることがあげられるが、この輪郭は、鎌倉所在の無縫塔などにも見て取ることができる。鎌倉近郊の石造物が、鎌倉時代後期以降、大蔵派の意匠と共通する各部に輪郭や格狭間を入れるという特徴を持つようになることは、この地域において大蔵派の斬新な意匠が模倣され、取り入れられていった結果とみられる。

また、関東地方の石造物は、鎌倉時代中期以前においては凝灰岩や砂岩などの軟質石材で造塔されたものしかなかった。しかし、大蔵派が関東へと下向する鎌倉時代後期になって、突如、安山岩製の石造物が席捲するようになる。このことは、馬淵和雄氏の指摘のとおり、大蔵派が硬質石材加工技術に関東へもたらした結果と考えられる（馬淵2005）。彼らのもたらした技術は、おそらく鎌倉の地で律宗が盛んに行っていた造寺、造塔事業、あるいは井戸掘り、架橋などの土木事業にも多大な影響を及ぼしたことであろう。

また、大蔵派は西大寺流配下の工匠集団として捉えられてきたが（前田1989）、大蔵派宝篋印塔の造塔背景からは、北京律僧の姿も垣間見える。先述のように、余見塔を造立した「僧覚一」は泉涌寺第七世長老覚一房覚阿とみられているし、覚園寺はいうまでもなく泉涌寺派の寺院である。さらに、安養院は現在浄土宗の寺院であり、宝篋印塔は浄土宗名越派開祖尊観上人の墓と伝えられているが、その前身寺院は律院であった可能性が高いとされており、大森順雄氏の指摘どおりこの地に東栄寺があったとすれば、ここでも北京律系の僧が本塔の造立に関わっていた可能性がある（大森1991）⁷。大蔵派は西大寺流配下という枠組みを超え、より広く各種の造営活動に携わっていたと推測される（岡本2006）。

このように、銘文中に見える大蔵派の動きは点でしかないけれども、そこから垣間見える彼らの姿は中世史上において看過できないものであった。

(4) 額安寺塔解体修理の結果

ところで、大蔵派が関東へもたらした硬質石材加工技術とは、具体的には何であったのか。これまで、その点については大蔵派の関東下向と期を一にして硬質石材による石造物が増えるという事象から指摘がなされてきたが、大蔵派が持っていた新しい技術が、新しい道具によるものなのか、新しい技法によるものなのかといった点は具体的な資料がなく等閑に付されてきた。

今回の額安寺塔の解体修理では、基礎の下面の未調整部分に矢穴が確認された。鎌倉時代以降の石造物の多くは、成形後、細部調整された石材を組み上げることによって成っている。したがって、よほど粗雑なつくりでない限り、成形痕は消されてしまうこととなる。このことが、石造物の製作技法の解明を困難にしているのであるが、額安寺塔は定形化していない段階の塔であるためか、基礎下端を地中に埋没させるように作られていたため、成形時の痕跡が留められていたのがある。鎌倉時代の石造物に見える矢穴は、これまで弘長2年（1262）銘の京都府東小阿弥陀石仏

にみえるものが最古とされていたが（森岡・藤川2008）、額安寺塔の矢穴はそれを遡ることとなった。矢穴については、森岡秀人氏の詳細な論考（本章3項）を参照されたいが、中村博司氏は、矢による石材加工技術こそが、伊派が中国よりもたらした技術であるとみている（中村2003）。実際、中国・南宋代の石造物にも矢穴がみられることが明らかになってきており（佐藤2009）、宋人石工が有していた矢を用いて石材を割る技術が、鎌倉時代前期には日本にもたらされていた可能性は極めて高くなったといえるだろう。

大蔵派の出自については、山川均氏が伊派から分派したとみる説を提出されているが（山川2008）、大蔵銘のある額安寺塔に矢穴が確認されたことは、少なくとも大蔵派が矢を用いて硬質石材を割るという大陸系の技術を有していたことを示している。大蔵派が造立した関東の石造物の特徴は、立体的で鋭い細部加工と写実的な表現、そしてバランスの良さにあるといえる。大蔵派が有していた技術は、おそらく矢を使うということのみではないように思われるが、今回の調査はその一端を窺うことができるものであったといえよう。

(5)おわりに

以上、額安寺塔を造立した大蔵派とその活動、そして額安寺塔調査の成果についてみてきた。大蔵派は、大和から関東へと下向し活躍したことが知られる当代一流の大工であり、額安寺塔は大蔵銘最古の塔であるとともに、大蔵派が大和の石工であったことを具体的に示す唯一の遺品である。大蔵派宝篋印塔の多くは、その造塔技術の高さと有銘であることから、国の重要文化財に指定されている。しかしながら、額安寺塔は長らく倒壊していたためか、現在でも大和郡山市指定文化財となっているのみである。

今回の修理工事の結果、明星池の中島に置かれていた塔は境内へと移され、破損していた部分も西村石灯呂店のご尽力によって元の形に復することとなった。向後、額安寺塔の価値が正しく世間に理解され、大蔵派の技術と活動が長らく伝えられることを願って、本稿のまとめにかえたい。

（文責：岡本智子）

¹ 代表的なものとして、川勝1960、同1974、前田1989・1991などをあげておく。

² 子葉が二重になる単弁。蓮弁の呼称については、斎藤2001による。

³ 子葉が二重になる複弁。

⁴ 宝篋印塔銘に「□宮根山之勝地湛精進池之靈泉是當六道之圖」とある。また、飛鳥井雅有の『春の深山路』には「又この山には地獄とかやもありて、死人常に人に行き会いて、故郷へ言伝てなどする由、あまた記せり。」とある。

⁵ 五輪塔銘に「右志者為地蔵講結縁衆等平等利益也」とある。

⁶ 落合義明氏は、こうした律僧による活動は石造物群の造営にとどまるものではなく、さらに箱根権現の再建、湯本宿・葦川宿などの整備といった事業とも一連のものであり、幕府関係者も関与した大々的なものであったとされている（落合2005）。

⁷ 東栄寺の位置については、落合義明氏が安養院のあたりと経師ヶ谷の2か所を想定しているが、いずれにせよ安養院の前身となる寺院には北京律系の僧侶が関わっていたとされている（落合2007）。